

kei の 自信なさすぎたレポート

僕は今まで生きてきて

自信がないことによってたくさんの損をしてきた。

本当だったらここが人生のターニングポイントだっただろう

っていうところで何度も何度も自信がないことによって

損をしてきたのである。

自信がないことは罪だ。

僕はそのことについて自分の人生を振り返り

反省の意を込めて

こういったレポートを書いていこうと思う。

~~~~~

僕は生まれつき自信がなかった。

まあ生まれつき自信ある奴がいるのかといわれれば  
それは生まれたての赤ちゃんに聞いてみなければ  
わからんことだが、それでも僕は自信がなかった。

僕が生まれたときの話を  
おばあちゃんに聞いたことがある。

僕は出産のとき、頭が引っ掛かって  
お母さんのお腹から、なかなか出てこなかったらしい。

で、おなかから出てきても、弱弱しかった、と。

おばあちゃんいわく、

「めえ～～～めえ～～～」と、

生まれたての子ヤギみたいな

か弱い鳴き声で出てきたらしいw

僕は生まれた瞬間から

自信なさげで生まれてきたのだw

これはもうある意味そういう運命なのかもしれないw

そんな僕は幼いころはお母さんっ子で、

いつもお母さんと一緒に過ごしていた。

なんか嫌なことがあったり、

気に入らないことがあって助けを求めに行ったのも  
いつもお母さんだった。

お母さんはすごく世話焼きで、  
極度の泣き虫だった僕をいつもよしよししてくれた。

僕はそんな世話焼きお母さんに  
甘えまくりながらすくすく成長していったのである。

お母さんはいつも僕のことを第一に考えてくれていて、  
僕はすごくそれに応えるように甘えまくっていたのだが、  
それにはいくらか問題があった。

僕は一人っ子なので、兄弟もないし、  
なんでも泣いたら許される家庭で育ってきたのだ。

なんか嫌なことがあったら

泣いたら解決する。

そんな風に育ったのだ。

だから、僕には

「自分で何か物事を解決しよう」

という精神が身に付かなかったのである。

そうなると僕は、

一度できなかつたことはとことんチャレンジしない子供になった。

たとえば、保育園の遊具争奪戦。

遊びの自由時間になったら、

運動場の倉庫にある三輪車の乗り物を取るために

みんなでダッシュする。

僕は1度負けたら、もう次からは  
どうせ取れないだろうと思って、  
人気のないめっちゃボロボロの押し車みたいなやつを  
取りに行くようになったのだ。

勝てないと思うものには挑戦しない。勝負しない。  
この精神は小学校に入ってから続いた。

足が遅かったというだけじゃなく、  
めちゃくちゃ運動音痴だった僕は  
運動がめちゃくちゃ嫌いだった。

休み時間にみんなでドッジボールするときも

「どうせ負けるし…。」

「どうせ勝ち目ないし…。」

って心の中で思いながら

ずっとボールから逃げ続けてるような奴だったw

チャレンジ精神ってのが皆無だったのだ。

親からも友達からも

運動は「センスない」と言われ続け、

自分も「そっだよね…。」と思い込んでいた。

この思考こそが僕の人生を狂わせたのだと

今になって思う。

僕を含め多くの人の思考は

センス > 努力

という誤った不等式が成り立っている。

これは仮に答えがそうであったとしても、  
こんな考えではそもそも努力なんて馬鹿らしいし、  
できないなりに努力しよう思考に繋がらない。

自信持つ前に初見で上手いかなかったら辞めてしまうから  
自信もへったくれもない。

「努力をしてもセンスないからどうせ無駄なんでしょ」



という思想に染まりきっていたのである。

だから、

得意だったゲームだけに特化して、

あとはなにもできない、ゲームオタク的な子供に

育っていったのだ。

そんなこんなで小学校も高学年になり、

小学校4年生の時、好きな子ができた。

なつきちゃんである。(笑)

僕はそのなつきちゃんとは、  
3年生の時に同じクラスだった程度だったのだが、  
4年生になって、別のクラスになって、  
急にかわいいな～って思うようになった。

でも、当時そのなつきちゃんと仲良くしていた子に  
イケメンでスポーツもできて勉強もできて家も金持ちで完璧な  
そうたくん という友達がいたのだ。

そうたくんはなつきちゃんのことを  
「なつき！」  
と呼び捨てで呼ぶし、

なつきちゃんのことを  
絶対意識してるだろうと思わざるを得ない関係だった。

そんな出木杉君みたいな子を前に  
僕はただただ弱音を吐いていた。

「どうせ無理でしょ。」

当時の自信なさ過ぎた僕は  
何の努力も行動もせずに諦めていたのだ。

戦って勝てない相手にはとことん挑戦しない、  
チャレンジしないのだ。

その後僕は、  
卒業まで、特に仲良くなることもなく、  
ただただ遠くでなつきちゃんのことを  
見ていることだけしかできなかった。

小学生の時に自信がなかったエピソードは

もう1つある。

僕は当時ケーブルテレビという、  
普通のテレビとは違って別個に契約した人しか見れない  
テレビ番組を見ていた。

その中にアニマックスというチャンネルがあって、  
24時間、アニメばかりを放送しているチャンネルだ。

そこで僕は、あるアニメと出会うのだ。

「テニスの王子様」というアニメである。

知ってる人も多いだろうが、通称「テニプリ」と呼ばれるやつだ。

僕はこのアニメを

いつもお母さんと一緒に見ていた。

知らない人にざっくりと説明すると、

天才テニスプレイヤーの越前リョーマくんが  
中学1年生なのに中3の先輩などを倒しまくって最強  
っていうアニメである。

僕はこのアニメに影響されまくって、

「テニスを始めたい！！自分もテニスやりたい！！」

って思い始めたのだ。

ただ、僕には自信がなかった。

挑戦というものが本当にできなかったのだ。

テニスがやりたいという旨を

お母さんに相談したとき、

「近所のテニス教室いってみるー？」

とお母さんは誘ってくれたのだが、

当時の自身がなさ過ぎた僕は

「うち、金ないでしょ。」

「お金もったいないからいい。」

とかいってせつかくの誘いを断ったのである。

もちろん、この言葉は本心ではない。

本当は、

「運動音痴の自分がテニス教室なんか行って  
からかわれるの嫌だなー。」

とか

「もし、行ってもセンスなくて、馬鹿にされたらどうしょう。」

とか

まだやってもないのにそんなことばかり考えていたのである。

これはバカすぎた。自分の息子だったら叱りたいw。

やってもないのに無理だなんて言ってるのは  
本当にもったいないと思う。

ましてや、テニス教室なんて、  
できない人がいくところである。w

しかも、まだ小学6年生なのに、

「1年生のころだったら通ってたのにな～～」

「なんで小1のころからテニスの存在教えてくれなかったん！！」

と親に八つ当たりまでしていた。

もう、どうしようもないガキだw

そのままテニス教室に行くのは諦め、



小学校を卒業した。

そしてそのまま中学校へ入った。

中学校へ入ると、

「部活動」というものに必ず所属しなきゃいけない  
制度みたいなものがあった。

何を選ぶか、非常に迷った。

僕は今まで記してきた通り、運動音痴だった。

そして、テニスは好きだった。(漫画で見るのは)

そこで選択肢は2つに絞られた。

運動しなくて済みそうな「科学部」と  
やりたかったテニスのできる「テニス部」だった。

本当だったら、

「やりたい方をやるべきでしょ！！！」

って言いたいところなのだが、  
僕には自信がなかったのだ。

運動部の過酷な練習に耐える自信がなかった。  
そして根性も忍耐力もなかったのだ。

自信がないっていうのは  
本当にもったいない。

こういうわかりきった選択肢であっても、  
自信がないことによって好きな方を選べないのである。

最終的に悩み悩んだ結果、  
僕はなんと「テニス部」を選んだのだ。

これは僕にとって今までにない  
最初の第一歩だった。

だが、それには裏があった。

決め手となったのは

クラスの女子が言っていたこの言葉である。

「科学部とかなんかオタクっぽいww」

この言葉を聞いて、科学部の方がリスク高いと思った僕は

なんとかテニス部に入ることになったw

だが、極度の運動音痴で、どうしようもない僕は

ただただついていだけで必死だった。

そんな中僕に不幸な出来事が起こる。

「いじめ」だ。

僕はテニス部に入っていたのだが、  
マジで運動ができなかった。

だから、周りの友達たちからかわれ始めたのである。

中学生の時期に特有のあの感じだ。

僕はいじめられることによって、  
かなりの自信をなくした。

がんばっても、がんばっても、

「ゴミががんばっても無駄でしょw」

とか言われるのである。

悔しすぎる。

でも、なにも言い返せない。がんばれない。

泣いた。泣きまくった。

家でも泣きまくった。

お母さんは心配してくれたが、ただプライドだけは高かった僕は  
本当のことを言えなかった。

ただただ一人、自宅の自分の部屋で毎晩泣いていたのだ。

それでも、

それに耐え続けながら、  
踏ん張って頑張り続けていれば何か違っていたのであろうが、  
当時の僕はやはり弱かった。

テニス部が嫌いになり、退部した。  
そして、不登校になった。

僕はもう、全てのことに対する自信を失った。

それからは家に引きこもってオンラインゲームの毎日だ。

むちゃくちゃ現実逃避しまくっていた。  
学校なんてろくなことがないと思っていた。

目の前の問題からもうとにかく逃げた。

お母さんに

「なんで学校行ってくれへんの…」

と泣きつかれることもあったが、

僕はそれに応えることもできなかった。

それからは学校に行っても週に1回とか、

ひどいときだと月に1回とか、

そのまま卒業までそんな感じだった。

かなりしょっぱい中学時代であるw



そして、高校に入って僕は、  
何とかしようと思って、  
「高校デビュー」を試みた。

太っちゃだった体系からも、かなり痩せた。

高校では部活には入らなかった。  
部活動はトラウマ過ぎたからだ。

高校生活の最初は順調にいていた。

だがまた不幸が起こった。

「いじめ」だ。

僕はなんでこんなにもいじめに合うのかというと、  
なよなよしていたからであった。

今まで僕はお母さんに頼りっきりで  
甘やかされて育ってきた。

だから、基本的に自分ではなんにもできない、  
甘やかされっ子だったのだ。

やっぱり、中学とか、高校とかの男子からすると  
なよなよしていた僕は、  
なかなか気に入らんらしい。

いじめに合ったことがある人ならわかると思うのだが、  
仲良かったはずのクラスでいきなり呼び出されて、  
直に

「何調子乗ってんねんお前。」

「しゃしゃり出んなや、カスが。」

みたいなことを面と向かって言われたら、  
相当自信を無くす。

しかも、それを見て、それまで友達だと思っていた  
今までの友達たちは、クスクス笑ってるのである。

もうこれはマジで地獄だ。

味わったことある人にしかわからないと思うが、  
泣きたくなる。

そうなった僕はその日から、  
授業中以外は常に机に突っ伏して  
寝たふりをしていた。

朝学校に来たら机の上に

よだれらしきものがかけられていたこともあった。

このレポートでは赤裸々に語っているが、

これは少々、思い出すだけで涙が出てくる嫌な思い出だ。

僕は気も弱いし力もなかったので、

言い返すこともできずに、なにもできず

ただ机で寝たふりしかできなかった。

気が弱いというのも、

自信がないからだ。

自分に自信が持てていれば、

あの頃だって言い返せていただろうし、  
今思えばしょうもないやつだったなと思う。

自信がない僕は、  
自信をどんどんさらに失っていった。

それからというもの、  
高2、高3で高校生活も  
クラスの片隅でひっそりと過ごし、

周りのみんなは青春を感じて過ごしていた高校生活を  
僕はクラスの底辺のまま終えることとなった。

もちろん、そのときは  
自信なんてもうなにもかもなかった。

僕は大学受験のときも、  
大学も自分の学力で行けるレベルのところしか  
目指さなかった。

自信がなかったからだ。

自信がないことでたくさん人生損をしてきた。

そして、大学に入学し、  
僕はまた「大学デビュー」を試みたw

大学となると、さすがに周りも大人に成長したので  
そんなカスみたいな僕を受け入れてくれる人たちばかりだった。

僕は大学に入ってから、  
バンドをはじめることにした。

理由は、「音楽が好きだから。」

と表では言っていたが、

モテそうだからだったw

ちなみに、

何のパートをやろうかと迷ったときに

僕はベースという4弦の楽器を始めたのだが、

ベースを選んだ理由も

「ギターより弦少なくて簡単そうだから。」だったw

もちろん、表向きでは

「低音がかっこいいから」とかわかっている風に言っていたw

僕はそんなしょうもない人間だったw。

そこから、大学生活はそれなりに楽しんだ！

今までの中学、高校ではできなかったことが  
たくさんできるようになった。

中学高校の経験から生まれた  
コミュ障なところは治らなかったが、  
それでも受け入れてくれる仲間がいた。

マジで最高の日々だった。

みんなが中学校や高校で味わっていたはずのことを



味わっていなかった僕にとって  
大学生活はもう楽しすぎた。

がむしゃらに将来のことも何も考えずに  
遊びまくった。

バンドもちまちま練習続けていくごとに上手くなっていき、

「努力し続ければそれなりにうまくなるんやん！！」

と少し自信も湧いてきた。

でも、その自信は  
崩壊することになる。

大学3回生の秋に  
バンドが終わることになった。

そして、就職活動の時期となる。

それまで僕の自信を保っていたものが  
突然失くなり、新たな壁が建ちはだかったのだ。

僕は今だけの人生を楽しみ過ぎていたのだ。

僕はバンドくらいしか取り柄のない人間となっていた。

バンドでベースが弾けるといっても  
プロレベルにうまいわけじゃないから、  
それだけで食っていくことはかなり難しい。

僕はその、バンドすらも失って、

自分には何も残らないんだ…。と痛感した。

それから僕は

途方に暮れた。

就職したくないし、バンドだけじゃ食っていけない。

僕にとってはどちらの選択肢も、厳しい現実だった。

なぜ、僕が就職が嫌だったかという

理由はいろいろあった。

一番大きかったのは、

その当時働いていた、某アイスクリームチェーン店での

アルバイトの経験である、(31日に安くなる場所)

元々不器用な僕は  
仕事ができない、覚えられなさ過ぎて、  
年下の女の子から超怒られまくっていた。

チョコレートサンデーみたいなものを作るのだが、  
それも、全然覚えられなくて、ぐだぐだしていたら、

「もう私が代わりにやるのでどこか行っといってください。」

って言われる始末だったw

本当に迷惑かけて申し訳ないと思った。

それと同時に

「ただでさえ最底辺のアルバイトという職種なのに、  
それすらもできない僕に何ができるんだ…。」

次第にそういう考えになっていった。

それから僕はある日、  
ビジネスと出会った。

そして自信がついて、人生が変わった。

ここではそれは語るまい。

僕とビジネスとの出会いから、  
月収 100 万円を稼ぐまでの物語は、

「月収 100 万円レポート」

という名のレポートで詳しく赤裸々に語っている。

気になる方はこちらから見ていただきたい。

[「月収 100 万レポート」はこちらから！](#)

僕はビジネスというものを始めて、

大きく人生が変わったといえる。

それはビジネスを始めてから今現在までの期間で

人生が変わったといえるのもあるし、それだけじゃなく、

なにより、これから先の人生が明らかに変わったのだ。

それは「自信」によるものが大きい。

僕はビジネスを始めるときに  
最初の一歩を大きく踏み出した。

自信がない、自信がない。

そんなだった僕が  
高額塾の先輩に連れられて、

大阪の街を歩き、アコムに借金しに行くのに付き添ってもらい、  
手がガクガクブルブルと震えながら、  
22万円の借金をした。もちろん人生初だ。

そして、  
30万円もの高額塾に入り、  
ビジネスの世界に1歩踏み出したのだ。

これを読んでいる人に自信出すために

30万円も出せ！

なんてことは言わない。

ただ、最初の一步、少しのリスクでもいいから背負って

勇気を出すことってことが重要なのだ。

何のリスクも背負わなかったら、

人は行動しない。

僕の人生を見ても、

上手くいったときは常にリスクを背負っていた。

僕はバンドをはじめたときも、

今までの貯金を全額はたいて、

12万くらいするベースを買った。



やらなかったらただのオブジェになってしまうリスク。

そして、ビジネスを始めるときもそうだ。

人ってリスクがないと、行動できない生き物なのだ。

その行動の結果、

だんだんと自信がついてくるのだ。

リスクに追われて行動し、努力をすることで

何かしらの形で何かは達成されるのだ。

それは

YouTube の動画が 1 本撮れた！ でもいいし、

転売で出品できた！ でもいいし、

ブログ 1 記事かけた！ でもいい。

そういう最初の一步がめちゃくちゃ大事なんだ。

それによって自信が生まれる。

僕は YouTube の動画を自分で始めて撮ったときは  
かなりの自信が生まれた。

「自分でもやれるんだ。 動画撮れるんだ。」

という自信だ。

小さな一步なのだが、これがめちゃくちゃ大事だ。

こういふ最初の一步を大事にして、  
自信を湧き上がらせるのだ。

自信っていうのは  
行動したら意外とついてくるものなのだ。

そしてこの、自信。

「俺ならやれる」という自信を持つことが  
全ての成功へのカギなのだ。

世界のアスリートたちを見渡しても、  
自信のない選手なんていない。

彼らは結果を残しているから自信があるんじゃない。

自信があるから結果を残せているのだ。

あの“イチロー”も、小学校の卒業文集で

「僕は毎日人一倍努力してるし、毎日野球の練習をずっとしてい

るので、必ずプロ野球選手に成れると思います。」

って書いてあるのだ。

それはもう努力からくる圧倒的自信なのだ。

野球の世界に比べたら、

ビジネスなんて体格も関係ない。

センスなんかもほとんど関係ないのだ。

皆平等な世界なのである。

昔、僕が親から

「あんたは運動のセンスがない。」

と言われ続け、

僕はセンスがこの人生での生き方を左右すると思っていた。

だが今、こうやってビジネスやらなんやらで  
自信に満ちた僕からすれば、

努力>>>>>センス

といえる。

最後に送りたいメッセージとして、  
僕の好きなマンガ「アイシールド21」から  
蛭魔妖一というキャラクターの名言をあなたに送ろう。

“才能には限界があるが、努力に限界はねえ。”

本当にこの言葉には共感する。

努力をしたことがない人は

努力というものを舐め過ぎだ。

努力をして、自信をつけることで

世の中のたいていのことは普通よりは上手くいくのだ。

だからこそ、ビジネスの世界でも、

全力で自信をもって努力と行動してほしいと思う。

「今までビジネスなんてしたことがない。」

「パソコンもインターネットも詳しくない。」

「勉強は苦手だ。」

ビジネスの世界に突入するときに、  
いろいろやったことないことがたくさん出てくるだろう。

僕だって引きこもっていたのでパソコンは得意だったものの、  
ビジネスなんてしたことなかったし、勉強も苦手だった。

でも、こうやって今、月に100万以上収益を上げている。  
パソコンのスキルも役に立ったのは  
タイピングの速度くらいだ。

そんな  
あーだこーだ言い訳をかましてしてるうちは  
成功しない。

「やったことないなら、つべこべ言わずにやればいい。」

と思う。

僕がビジネスの成功法則をたった1つあげるとすれば

「素直にやり続けること」だ。

学んだことを

自分にできるかどうか、上手くいくかどうかで判断せずに、

まずは素直にやってみてから判断したり、修正する。

これが大事なんだ。

上手くいってる人がそう言ったら、

素直にそれを実行する。

「自分ではそれはきついな〜。」

と感じることも

素直に実行することが重要なのだ。



その中では心理的にもきついこともあるだろう。

でも、自分の考えとは一致しなくても、  
実行するのが成功への近道なのだ。

「何百万、何千万、何億と稼いでいる人と、  
果たして、自分が同じ思考や価値観を持っているだろうか？」

そんなはずはないはずだ。  
だからつらいこともある。

僕だって平気で借金していたわけじゃない。

死ぬ気で借金していたのだ。

きつかった。つらかった。

でも、僕は今こうして月に100万くらいを稼げるようになっている。

それは、成功者の言うことを素直に聞き続けたからだ。

ただ素直に聞き続けた。

心理的につらい状態も全部耐えて、それでもやり抜いた。

それこそが成長である。

ということでこの辺で今回の僕の

「自信なかったレポート」を終わろうと思う。

感想をくれたら嬉しいです。

立花 京

PS.

感想はメールの返信か、

LINE@「@bij1056w」

感想くれたらすごく励みになりますし、

僕はそんな積極的な人の名前は覚えると思います。

ぜひぜひ1行でも10文字でも良いので送ってきてください。

こうやって自分の感想や気持ちを誰かに伝えることが

ビジネスではかなり重要になってきます。

あとメルマガもやってます。

月収100万円稼ぐメールマガジンはこちら

[メルマガ登録](#)